

# 仙台で評判のビュッフェレストラン

六丁目農園（株式会社アップルファーム）

本誌編集委員 みなと障がい者福祉事業団 理事 大森八恵子



## 編集委員から

「福祉は人だね」と、よくいわれませんが、これは福祉だけではありません。就労支援をしていると思うのは、障害者雇用の成功の裏に「企業の中の人」の力が大きいことです。六丁目農園の取材で渡部哲也さんにお会いして、改めて、確信しました。

取材日：6月18日、19日



## 六丁目農園(株式会社アップルファーム)

〒984-0031 宮城県仙台市若林区六丁目字南97-3  
e-環境仙台ビル  
TEL 022-390-1101 FAX 022-390-1102  
e-mail applefarm81@gmail.com



渡部哲也代表取締役

が育ったといえます。19歳でオーストラリアの学校に

底の生活を体験していま

た。これが障害者雇用に参加

時代です。私は義弟

ささいなことにも我慢が

### 義弟の事故がきっかけ

「約20年前、義弟が交通事故に遭い、3カ月間集中治療室に入院しましたが、奇跡的に助かりました。でも、退院しても感情のコントロールができなくなり、

2011(平成23)年3月に発生した東日本大震災から1年3カ月。いまでも多くの問題が残る東日本。その東北・仙台に、本人の自主性を重んじる障害者の雇用を実現し、商売として成功しているレストランがあると聞き、訪れました。いまままでにないこのビジネスモデルが、東北の復興に大きな役目を担っています。6次産業をベースに、罹災した人や障害のある人を100名雇用するという壮大な計画。そのキーマンが、今回取材をした「六丁目農園」の代表取締役の渡部哲也さんです。



ピザを焼く堀籠達さん

行き、多感な時期をいろいろな人種の中で分けへだてなく、フレンドリーな環境での生活を体験しました。

そして、渡部さんが障害者雇用を始めたのは3年前のこと。障害者を一定期間預かる「職親制度」を使った「たい焼き屋」で、6人の障害のある人の職業訓練を始めたのです。その後、カレー店、石釜パン店、移動販売、農園管理などで障害者雇用をすすめていきました。

たい焼き屋で働いていた堀籠達さんは、38歳の発達障害者です。働く前は、うまく環境に順応できず、空気も読めない人でした。「親のせいで自分はこうなった」と家庭内では暴れる日常でした。働き始めた当初も、無断欠勤はする、さぼる、暴れる、集中できないなど、近所



自然派ビュッフェレストラン「六丁目農園」。いつも開店と同時に満席になる人気レストランだ

でも有名だったそうです。その彼が、たい焼き屋で忙しく働くこと、仕事を任せられることで見違えるようになっていったそうです。いまは家を出てひとり暮らしをしています。

福祉の経験がなかった渡部さんは、「堀籠さんが問題なのではなく、環境が問題だったのではないか」と思ったそうです。渡部さんは、その後多くの福祉施設を見学して驚きました。「みんなが生き生きと働いているように見えない」と感じたといいいます。そして、たい焼き屋での経験から、障害者がやりがいを持って生き生き働ける場を作りたいと思ったそうです。

渡部さんは福祉の勉強をしてきたわけではありませんが、障害者雇用を始めて、「適材適所で働きがいを感じると、ちゃんと能力を発揮できる」と確信したそうです。

### 障害のある子の親も一緒

渡部さんは、2010年に株式会社アップルファームを設立。それまでの障害者雇用の実績を評価され、宮城県の障害福祉サービス事業所として認可されました。

仙台東インターチェンジ近く、バイキングスタイルの自然派ビュッフェレストラン「六丁目農園」がその名前です。決

して交通の便のよい場所ではありませんが、ガラス張りの明るい店内には、手作りにこだわった体にやさしい60種類もの料理が並びます。

中央にはガラス張りの水耕栽培のプランターが置かれ、ハーブ類が栽培されています。味はもちろんですが、料理を作っているのも、並べているのも障害のある人たちだということに驚きます。オープンは2010年11月。ランチタイムだけの営業ですが、その話題性とおいしさが評判になり、連日予約でいっぱいです。「六丁目農園」は、障害福祉サービス



厨房でも多くの障害者が働いている

事業の就労移行支援と就労継続支援A型事業所です。障害のある人はA型で30人、就労移行で10人、障害のない社員が15人働いています。A型では全員、最低賃金以上で雇用しています。

ここでは障害のある社員を「クルー」、障害のない社員を「メイト」と呼んでいます。メイトさんの多くは、障害のある子どものお母さんや家族たちなので、障害のことをよく理解をしている人が多いようです。メイトさんの子どもたちは、特別支援学校の生徒や発達障害者で企業就労していて、メイトさんは子どもたち

を学校や会社に送り出してから、レストランに出勤してきます。

「e(いい)笑顔、e(いい)職場、e(いい)仲間」が、六丁目農園のモットーです。

## 雇用効率がいいビュッフェ

ビュッフェレストランでは、お客様は食べたい料理を好きなだけ食べ、帰りたいたときに帰っていくので、自分たちのペースで料理作りに専念できます。渡部さんは、障害のある人たちの能力を最大限に発揮させて、効率よく雇用することを考えて、このビュッフェレストランにたどり着いたそうです。

また、飲食業界に長くいた経験から野菜にポイントを置きました。自社の畑もあります。提携農家から、味と質はいいのに売れない、形の悪い野菜を仕入れます。農家の収入アップと安定にもつながります。

その野菜を刻むのにスライサーなどは使いません。障害のある社員が包丁で丁寧に刻みます。サラダに使うダイコンやニンジン、キュウリの千切りなどは、「器具で、そろった細さに刻まれたものより、はるかにおいしい」と料理長の桜井英輝(ひでき)さんはいいます。この穏やかな桜井さんはアスペルガー症候群です。

たい焼き屋で働いていた堀籠さんは、いまは「六丁目農園」の石窯でおいしい

ピザを焼いています。筆者は最初、この2人が障害のある人だとはわかりませんでした。本人にいわれてわかったぐらい、障害を感じさせません。

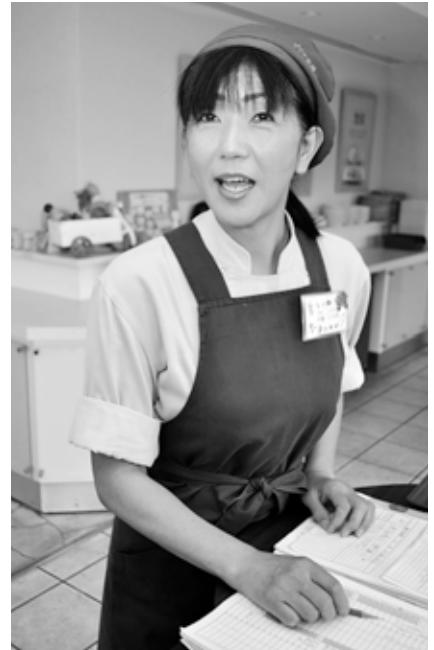
11時の開店から、「おいしいピザが焼き上がりました」「大根もちができました」「どうぞお召し上がりください」……と声をかけながら、店内

の棚に並べていきます。すると、見る見るうちに料理の前に人が並びます。

ホールでデザート<sup>いまいずみ</sup>を並べていた今泉朝会<sup>ともえ</sup>さんは、軽知的障害のある笑顔の素敵な女性です。障害者雇用で定評のある衣料品店で働いていましたが、体調を



桜井英輝料理長



千葉いつみ店長

悪くして退職しました。3月11日の震災で家が全壊したそうです。2011年11月からここで働いています。

店内の清掃をしていたのは、小野絵美子<sup>えみこ</sup>さんです。仙台市荒浜の和菓子店で働いていましたが、大震災で会社はなくな

ったそうです。帰宅途中に津波に助かされたが、奇跡的に助かったと教えてくれました。彼女も2011年11月から働いています。広い店内をメイドさんと2人できれいにしたあとは、とてもいい笑顔で楽しそうに、ホールに出来立ての料理を運んでいます。千葉さんのお



次々にできあがる料理を運ぶ今泉朝会さん

子さんは、幼いときの病気で障害がありますが、いまは企業就労しています。千葉さんは明るい接客と笑顔で、レストランを盛り上げています。予約のお客様の席を案内します。お客様の数、ご家族か、友人か、仕事の関係か、見学者かなどを瞬時に見極めて席を決めていく様子に感心しました。

「六丁目農園」には69の客席があります。ランチ料金は、中学生以上1555円、65歳以上のシニア1239円、小学生935円、幼児515円、3歳以下は無料というシステムです。

## 6次産業化で雇用創出を

東日本大震災当時のレストランの様子を、渡部さんに聞きました。

「地震発生時は店内のあらゆるものが壊れました。近隣で津波にのまれたところが多く、犠牲者のなかには常連さんもいました。想像を絶する事態でした。レストランは海から3・5キロですから、被害を受けてもおかしくなかったのですが、幸い海側に高速道路の土手があり、津波が1メートル手前で止まってくれた



ホール担当の小野絵美子さん

のです」

時間的にはランチタイムが終わり、後片付けをしていたときだったようです。オープンして4カ月で、これから更なる展開を模索していたときの東日本大震災でした。

レストランが入るビルには自家発電の設備があり、周辺住民の緊急避難場所となりました。店内の食糧を利用して障害者を含めたスタッフ全員で炊き出しを行い、夜になると、真っ暗な街中に「六丁目農園」が入っているe-1環境仙台ビルの明かりがぼつんと灯ともっている感じでしょうか。周辺のみなさんはこの明かりを指されたのでしょうか。

「六丁目農園」は、大震災の1カ月後の4月9日に営業を再開しました。しかし、余震のなかでの営業で、震災前には1日に110人以上あった客が激減しました。しばらくの間は不安と寂しさのなかでの営業でしたが、徐々に客が戻り始め、いまでは震災前以上の利用客があるそうです。

渡部さんは、今回の震災で6次産業の強みがわかったといいます。「6次産業化（1次×2次×3次）のベースは労働力。そこを高齢者、障害者、そして震災で職を失った人の雇用創出の場にした」と、東北復興プロジェクトでは、理事長として100人の雇用創出に向けて

### 6次産業モデルファームの完成予想図



東北復興プロジェクト「TOUHOKU ROKU PROJECT」

全力を出しています。

今回の取材に「六丁目農園」を選んだのは、就労継続支援A型事業所というところだったからです。訪問する前にいろいろ調べていたら、オーナーの渡部哲也さんがとても気になりました。渡部さんは障害者雇用に参入して、「たかが3年・されど3年」の人なのです。

障害者雇用に、人（キーマン）が周囲に与える影響力はいかに大きいかをあらためて思い知らされた取材でした。